

泉南市中学生自死の重大事態の調査について

1 はじめに

令和4年3月18日、泉南市在住の中学生が自死により命を落とすという大変痛ましい事件が発生しました。

この事件の調査のため、令和5年1月27日、泉南市は当委員会を市長の付属機関として設置しました。当委員会は市長から諮問を受けて、これまで計40回の会議を行い調査・検証を行ってきました。

引き金になるような事件もなく、動機を示すものも残されておらず、自死から1年近く経過していたこともあり、大変難しい調査となりました。

我々委員会は、当該児童がどのような日常生活を送っていたのか、できるだけ生の情報をもとに正確な事情を把握したいと考えました。このため、母親はもちろん、家族や親族、教員、管理職、教育委員会など多くの人から直接話を聞き、また多くの資料を分析し、同学年の生徒のアンケート調査を行うなど長い間にわたって調査を行い、この結果を踏まえて検証を行ってきました。

その上で、当委員会として以下のような結論に至りましたので、ご説明致します。

2 自死の原因について

(1) 自死に至るメカニズム

人がなぜどのように自死を決意するのか、これまでさまざまな研究が行われていますが、一つのことが直接の原因となることはむしろまれで、一般に、様々な要因が複合し複雑に積み重なっていく中で、時間をかけて徐々に危険な心理状態に陥っていくものと考えられています。

当該児童は小学校・中学校において、また自死の直前において、つらい出来事や希望を失わせる出来事をいくつか体験しています。しかし、それらの出来事の一つ一つが単独かつ直接に原因となったと考えることはできませんでした。

(2) 背景事情及び原因として考えられるもの

当該児童には二つ歳上の兄がいました。兄が小学5年生のとき、授業中に教員の不適切と言える指導がありました。これを機に、母親と学校との関係が非常に悪化しました。兄弟はまわりから孤立し、いじめを受けることがありました。学校はこのような状況を改善しようとしたものの十分な成果を上げることができず、

母親の不信感と怒りは続きました。当該児童が小学6年生のとき、学校が朝に家庭訪問を行わない方針に変更し、そのほか、学校及び教員に十分とはいえない対応があったことが原因となり、母親の学校への感情はますます悪化していきました。当該児童は小学生であったことから、母親の影響を受けることになり、当該児童と学校との関係も悪化し、6年生の1年間は不登校となりました。

中学進学後、学校との関係は少し改善したものの、長い間にわたって積み重なった不信感が払拭されることはなく、またいじめもなくなる中、1年生の11月、母親は学校に対し、小学校時代に起こったことを生徒に伝えるよう学校に求めました。学校がこれを断ったことをきっかけに母親と学校との関係は断絶しました。当該児童も、この関係に影響を受け、自死まで不登校が続きました。

このように当該児童が学校に対する不信を深く積み重ねていく中、苦しみから逃れるため、親子は市外の中学校への転校という選択肢をとらざるをえませんでした。しかし、令和4年3月に入り、教育委員会から転校は市内の中学校に限ると伝えられました。これにより、当該児童は苦しみから逃れる希望が絶たれたと考えたと推測されます。それと近い時期に、それまで継続していた家庭訪問がなくなり、学校から「見捨てられた」という感覚を覚え、さらに、自死の前日に兄の志望校の合格が伝えられ、自分の不登校状態による学業不振と相まって、将来への不安が生じたものと考えられます。

これらの出来事が不幸にも同時期に起こってしまったことで、当該児童にとっては幾度となく押し寄せる波のように、永遠に続くかもしれない苦悩にさいなまれ、心理的狭窄に至り自死を決意することに至ったと考えられます。

3 最後に

我々委員の仕事は市長への答申とこの報告書のご説明をもって一応終了となります。

しかし、この事案への取組みはこれから始まるものと理解しています。

報告書の最後に、今後同様の事件が起こらないための提案ないし要望を述べました。

子どもが自ら命を絶つという不幸な事件が二度と起きないように、本報告書の趣旨を取り入れながら、今後泉南市において万全の対策をとられるよう心から要望するものです。